

10 月総評

今月は日常のなかの危機意識を描いた作品に惹かれた。いつも思うがそれぞれの書き手が自身の表現を模索する姿勢に感心している。

包丁をはじめて人に向けて夏

玻璃 愛媛県

やや生々しすぎる表現に賛否が分かれるであろうが、言葉にできない感情を作品に込めようとする姿勢に共感する。『初電車 他人に肩を貸していて』、『梅雨は闇 治安のための少女たち』など、ほかの作品にもいえることであるが、荒削りの表現のなかにも、訴えるものがある。書くことで生の不安とのバランスをとろうとしているようにもみえる。

スタッドレスタイヤの
CM流れると
母は毎年ため息をついた

加藤 万結子 愛知県

何故、溜息をついていたのかは伏せられている。それでも CM の流れる季節に何か大きな出来事があったことが伝わってくる。この人の他の作品『鮭の不漁を聞くと／帰れないわたしと／同じだなんて思う』についても同様であるが、作為的でない淡々とした表現に惹かれる。

折紙のみかん勤労感謝の日

藤田 ゆきまち 三重県

置かれた折紙は子からのものだろうか。それとも妻からのものだろうか。短いことばが、さまざまな物語を浮かび上がらせる。

お歳暮はハム裏庭の豚のハム

藤 雪陽 長野県

見慣れているハムが裏庭の豚のそれとわかった瞬間、人は驚くに違いない。ありふれた日常のありふれた残酷さにも容易に慣れる私たちだとしても。

とおい雪 ふれるための儀式

小野寺 里穂 東京都

ふれるための儀式とはどのようなものだろうか。雪はこたえてはくれない。ただそれは、とおい記憶の片隅で呼び起こされるようなものなのかもしれない。

深夜二時牛井チェーンの店内に
人がいること知った冬の日

マズルカ 山口県

牛井チェーンは24時間営業なので、深夜に人がいることは当たり前だけれども、知識として知ることと、実感として知ることとは全く異なるだろう。ここに描かれるのは、いうまでもなく後者で、真夜中にもかかわらず等身大の生きた人間が、そこにいることを知った、驚きにも近い感情が表現されている。

冬の星まだ溶けきらないハッカ飴

吉沢 美香 宮城県

溶けきらない飴はどこかせつない。溶けきってしまったならば、いっそさっぱりするのと思う。その中途半端なところは、日々のくらしとどこか似ている。だからだろうか。さえざえとした冬の星が、溶けきれない飴をやさしく照らすような錯覚におそわれる。

栗を焼く父の悲しさ知るヨセフ

田崎森太 東京都

「人はパンのみに生きるにあらず」という言葉は、パンより重要なものがあるということを表したのではなく、パンがなければ絶対に生きられないということを記したものである、といったことを書いたのは吉本隆明だと思う。そうした動かしようのない事実に向き合うときに歌は生まれるのかもしれない。同じ作者の作品『虫の夜弟も銀河に加わりて』。これは別離の歌であろうか。これもまた動かしようのない事実に向かい合わざるを得なかった結果の歌なのかもしれない。

囀りの中に恐竜だった

奎いう子 佐賀県

たのしんで書かれた印象を受ける。新鮮なことばのイメージが読み手にも伝わってきて、それがいい意味で作品にも表れている。読者をたのしませるには、まずは書き手がたのしむというのが、いちばんなのかもしれない。同じ作者に『丸の内署所轄雪のハイヒール』という魅力的な作品がある。

進路指導受けても

まだ雪になりたい

あお 奈良県

雪へのあこがれを捨てきれないものの美しい異議申し立て。他の作品『内定は花野にあるって聞きました』や、『模試の結果／捨てられないのに成人式』についても同様であるが、まっすぐな心情の描写が、作中の人物への共感を呼ぶ。

夜のジャングルジムに

雪が積もる

高々 愛知県

夜のジャングルジムに雪が積もること自体はどうということもないけれども、それを見る人のほうにこそ、この作品の主題はあるだろう。夜、ジャングルジムに積もる雪をじっと見ている人の心のうちが情景とともに伝わってくる。

冗談が飛び交っている飲み会の
途中の間の静けさのくらやみ

豊富 瑞歩 茨城県

『くらやみ』は、ふとした瞬間に訪れるものに違いない。その瞬間は、何の前触れもなく起こる。明暗をとまなう、酩酊のなかの醒めた時間。特に改行前の前半部と、改行後の後半部分との書き分けが、作品をより印象深いものにしている。

地下鉄の
シャッターは閉められていて
あなたは初期のころが好きでした

松下 誠一 東京都

作品にみられる落差や飛躍がこの書き手の魅力だろう。閉められたシャッターからの展開や、初期のころのあなたという通常では使わない表現に惹かれる。他の『殺されてみたい／殺しもしてみたい／なるべく波の音を聴いていたい』『やることを書いておくメモ／でも全部できるわけない／夜のあじさい』といった作品においてもそれは健在で、不安を内包するざらざらとした質感の作品には独特の魅力がある。

秋だから （とうめいな
自分の骨を買いに行く ）

立花ばとん 東京都

作品中の括弧と空白のスペースが効果をあげている。同じ作者の作品に『理科室の／ むこうに雨が降る／理科室は静か』『放置自転車たちつと』というのがあるが、表現におい

て様々なことに取り組んでいる様子がうかがえる。いずれの作品も考えられた構成となっているが、多様な表現に挑戦しながら独自の表現を模索していったほしい。どの作品にも共通する乾いた表現が持ち味である。